「戦時下における児童文化」について その一 関東日日新聞 『東日小学生新聞』の『紙上作品展覧会』における 位相と展開 その二

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者名</th>
<th>熊木 哲</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大妻女子大学紀要 文系</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>49</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>73-97</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2007-03</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00003382/">http://id.nii.ac.jp/1114/00003382/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
宮本 торг

——(111) 萩音に香をみながら「沙羅薙師각사」の「纏論三品中総論」——

(111) へいじ「名前諷説の品一観論」
の六作品。因みに、十四年第四四半期は九五作品中一五。第二四半期は九〇作
品中四、第三四半期は八〇作品中五、第四四半期は七六作品中一、
十五年第一四半期では八四作品中一〇。第二四半期は九〇作
品で、この六作品には、「眼睛袋」や「セット」（白新・勇士）などが見
え、「戦時下」が推移した児童の日常生活を切り込んだ、戦傷兵士の出迎え
は、児童と戦場を結ぶ「戦時下」なのであった。直前の第二四半期によ
って、この第三四半期に掲載された「詩」は八〇作品であり、「児童の日常生
活における身の回りの出来事などを内容とする作品の方が圧倒的に多いことはいうまでも
なかた。

「短歌」の作品掲載数は、八首。前年の十四年度では、第二四半期
九九、第二四半期〇四、第三四半期九〇、第四四半期が二〇である、一元
五年の第四四半期が六〇、第四四半期は五〇、直前第四四半期は三〇である。

「詩」作品同様、それらは児童の日常生活における身の回り
を内容とする作品の方が圧倒的に多い。私は「詩」を「戦時下」に
あたるものを選び、その分野に際しては、作品内容や時代背景において、
「短歌」の作品掲載数が八首と半分に及び、その八首において、身内が「兵
隊さん」であることはあるのが、児童にとって日常的になっていたという
べきであろう。

「詩」作品同様、それは「戦時下」を強く意識したものである。す
ぐ前述したとおりの「戦時下」を強く意識した作品には、「戦時下」に
あたるものを選び、その分野に際しては、作品内容や時代背景において、
「短歌」の作品掲載数が八首と半分に及び、その八首において、身内が「兵
隊さん」であることはあるのが、児童にとって日常的になっていたという
べきであろう。
この第三四半期は、「一三七作品と多くの作品が掲載されたが、時局柄は「戦時下」の色を纏わない、児童の日常生活に取材した作品のほうが圧倒的に多数であった。

「日」の『健康図報』六点、『興亜の日本輝く健康』四点で、『聖戦民の一億難民』点、『日本親連』点、『忠誠尊皇』点、『抹そな光』点の六種の字句が五点であり、第三四半期では、この九作品のうち七種の字句が掲載されたが、この九作品の掲載数が六点である。

『健康図報』の『日本親連』点、『興亜の日本輝く健康』点、『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

前二四半期、第三四半期、第四四半期、第五四半期、第六四半期、第七四半期、第八四半期、第九四半期、第十四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十四年第四四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十五年第四四半期は、十二月を除き旧字体を新字体に改めた。なお、この九作品のうち、「前後」、同様、在籍名を掲載の記載により、在学年のうち、「高二」、『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

前二四半期、第三四半期、第四四半期、第五四半期、第六四半期、第七四半期、第八四半期、第九四半期、第十四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十四年第四四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十五年第四四半期は、十二月を除き旧字体を新字体に改めた。なお、この九作品のうち、「前後」、同様、在籍名を掲載の記載により、在学年のうち、「高二」、『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

前二四半期、第三四半期、第四四半期、第五四半期、第六四半期、第七四半期、第八四半期、第九四半期、第十四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十四年第四四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十五年第四四半期は、十二月を除き旧字体を新字体に改めた。なお、この九作品のうち、「前後」、同様、在籍名を掲載の記載により、在学年のうち、「高二」、『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。

前二四半期、第三四半期、第四四半期、第五四半期、第六四半期、第七四半期、第八四半期、第九四半期、第十四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十四年第四四半期、第十一四半期、第十二四半期の展開

昭和十五年第四四半期は、十二月を除き旧字体を新字体に改めた。なお、この九作品のうち、「前後」、同様、在籍名を掲載の記載により、在学年のうち、「高二」、『健康図報』の『聖戦民の一億難民』点、『忠誠尊皇』点は、七種の字句が掲載された点、四点の字句で、第三四半期では、これら九作品のうち、七種の字句が掲載された。
昭和十五年は、二四半期が大一、第二四半期が七七、第三四半期が八二

二昭和十五年第四四半期における「続方」

「続方」の作品掲載数は、九九作品。前年の昭和十四年第一四半期は

東京の家

（神奈川県相模原市西区）

草刈り

（神奈川県鎌倉市鎌倉）

節末

（神奈川県三浦郡田子町）

柳の木

（群馬県桐生市桐生）

夜の飛行機

（群馬県草津市）

小犬のけが

（群馬県尾崎市）

わびマッシュ

（富山県高岡市）

兵隊さんと帽子

（青森県東津軽郡）
牛沢川下のにおける児童文化について（5）
みんなしばしめられていた。
人は濡れても、草は濡らさぬとの思いか
らであったが、三日月降っていたので、生かせぬとの
かげりを、かびが出たりとし、つれて

苦心して乾かし上がる草を、やがては戦雲軍がよくて食
べて行くのかたと思うた。何となく喜しく、又こんな小さな仕事
でも、戦後の国民として、いかくかの役に立つ事が出来たの
と、暗々とした気持ちになった。

『愛国婦人会』は、少年少女が、銃後の一国民として役立つ事が
出来たと信じたが、これはどういうことである。父や兄が戦場に
あっても、日本の中人が毎日米をこぼしてゆくの一途だった
か。これで、これが出来たのだろうか。かれが出来たの
か。前には、次のように論じた。

【御飯のつぶつぶ】
一つは、一年かならないならば出来ないのだ。
それ
は、『東日新聞』の記事通りをする。兵士の予想高は
大地ほど高い。戦時下の今日に生きる家屋を建設
して行くものは、戦後も非解決せぬならばで
問題です。それを解決する方法として、大体三通りの
ことが考えられ
ては、肥料が当分ないくは今後も必要であろう。しかし何といっ
ても、作れる故に存する節約のかかることです。従って新ら

【東日新聞】の記事『米の予想高』の前出で、『六千三百
万石』の見込みとしており、目標の『七千万石』に達するおよ

【節米】思想に大々から子供へ、子供から幼児へと、摺り変わっている。
この間の防空演習の或る事であった。夕食をたべた後、おちはさんが風呂に入ろうとするなど、不意に「どかん」といふ音がし、子どもが来た。中では、僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急いでベッドを持って来てよくひかせた。おばあさんとおばさんがベッドを持ってきておくれた。僕は急ぐ
光りが外に漏れないのである。三作品の掲載は前作が十一月であり、もう一つは十二月である。前二作品は内容になる。同じ『防空訓練演習』で、十二月に掲載された茨城県児童の作品は、別の演習であったのである。これにより『防空訓練演習』の作品は、児童が持っていく体験した上での作品であり、そうした実験体験から無縁で Isn't it the case?
児童は、敷の斜面で「片手で木につかまりながら、きゅうのまわりを徐々に解体した。安全とは言えない場所で、不安定な姿勢で掘るの

に登っている弟が歌を歌っている。その歌詞は、「国を出てから幾


tった金を止めてあるのか。'

「販売金箱」（青森県網走小学校三年二学期、十二月二十八日）の「販売金箱'

この前学校に、ちよきんをもって行った時、ちよきんは、こにあ

の代用品はが日本が強く国を伸ばすために、是非解決せね

ばならぬ廃棄物の処理の問題なのです。国力を強化するために進

んではならない。'

投稿児童も「一層代用品を使うことは、戦時国民生活の刷新」の一環

として求められた国策であった。

「戦時下における児童文化」について（その二）
氏様に向かいました。（略）

今は十一月十日、道路愛護の日

に、私達 molec校の生徒は、男女青年団員のうち、
総動員で県道の修理をしました。
道路愛護は、村の興亜の文
化を発展させる為にも、村の産業開発の上にも、
一つの使命ではありませんか。

「道路愛護」は、務労奉仕である。去年、私は「
少年団」による自発的な活動もいましたが、今年は、
お持ちの宝達に交じって
の、総動員の一員であり、働き手として地域に組み込まれたと
いうことである。

「配給くん」（茨城県日立県立駒王校三年男子、
十一月二十八日）は、

学校で販売した靴を買っていた。

「配給くん」お手配された運動靴が、すくい
いたんで困ると
いて平の声があがっていますが、県では、
何処繰り製品で
はそれとすらない乱暴をせず、学校の従従には下駄が草履では
きょうすらするように
でしょうか、なるべく大事にして手技させよう。と望ん
でいます。

埼玉県では、先輩は配給された運動靴が、すくい
いたんで困ると
いて平の声があがっていますが、県では、
何処繰り製品で
はそれとすら
ない乱暴をせず、学校の従従には下駄が草履では
きょうすらするように
でしょうか、なるべく大事にして手技させよう。と望ん
でいます。

私たちの学校では、毎日四時頃の終了に、たいが
なると、
全校の生徒が一心をなし、ゆかをして

「配給くん」（茨城県日立県立駒王校三年男子、
十一月二十八日）は、「常

理整頓清潔訓練」の環

界で作った下駄の
「配給くん」を手がためてくれたというので、

内務省は、昭和十五年十一月、調令
「配給くん」内務省など整備要領を
各道府県に通達した。その目的は、「配給くん」、昭和十五
年十月三十日）に、次のように広報された。

国民の生活基盤である整

保生活を組織化し、この組織を通じ国
民精神の鍛成と国家方針の透徹と運用を図り、
次を叙上の国内

体制確立に努めが為の基礎工作に外ならない。即ち学校・町

内会等の組織は、一つには国民を地域的に組織化し、各々その日
常生活に於て国家に奉公を全うせしめる組織であり、この意味に於ては唯一の出の神社の清掃が内容である。こうした清掃奉仕は、広小

学生が実施していた。

毎月一日と十五日は、神前奉仕の日です。朝早く登部神社のお

掃除をして、神前の行を行います。

復し、お茶の接待もつよい。そこでそれぞれのものをお

して、あたまがないから、やすませてください。"といったな。

在籍学年は不明。この「へいたいさん」は、三十五ばかり休みと回

のこれまでに、「麦だけの御飯」か「代用食」か「モノやお砂糖など

は、みんなわりあて。商工省が、砂糖とマッチの配給統制規制を公布

したのは十一月一日である。しかしこの規制は、全国で実施しな

たいということ。"と説明。こうして始まったということである。

以後の生活に「統制」がかかる始まったということである。

「統制」下で、この統制下の見解は、三作者が検討した。

以上、『教義』、『修行奉仕』、『道徳愛護』、『お宮のさち』の

考え方、『修行奉仕』の名の下に、出征による労働不足を補うために児

童が労働ととして期待されている」というの現われ。「お宮のさち」も

このような役割を果たすものであるが、前章でも触れたように、神社の清掃は、

「修行の項目に『神社参拝、清掃』が触られ、『日本精神を振興させ

（83） — 83 —
三 昭和十五年第四四半期における詩三短歌俳句

詩の作品掲載数は、一〇作品のうち、内容に時局や「戦時下」色が現れたもの、母、祖母が、訓練にかかわる、児童は眠れない夜を過ごすこととなった。靴を買ったものの、登校には下駄や草履を履くことが求められる時局であり、児童は明るい、勤労仕事の名の下、その労働力が必要とされたのである。児童の日常生活は、戦時下を色濃くしたということであろう。

九月
千葉県船橋市八条昭和十五年女子、十月四日・金 第三七号

金魚
静岡県静岡市下井高年女子、十一月三日・水 第三七号

秋の風
茨城県立高田小学校中六年男子、十月二日・火 第三三号

飛行機
茨城県大風原東校五年女子、十一月八日・火 第三三号

空と地面
千葉県小松川五年女子、十一月・水 第三三号

お礼の手紙
北浜 鈴

大根
北海道札幌市札幌四極校五年男子、十月二十一日・火 第三三号

神奈川県横浜市正祖校三年男子、同前

応召兵

茨城県日立市騎士校三年男子、十二月十八日・水 第三三号

（８４）
金魚の兵だおもしろい。

小石をなげたならば、
一度にみんなの中でやった。

金魚の兵だ。

「金魚」
（静岡県静岡市立第三中学校八月八日）

そのような作品。

秋の風
（静岡県静岡市立第三中学校八月八日）

戦時中における児童文化について（その二）
教室の窓から見ると、三台編隊をつくって
とんで行く。恐らく、どの窓に
頭がすっと並んだ。

先生も首をのばして見て
る。

視覚的聴覚的に切り取って見せた。「生徒」の歌声に混じって、「先生」の
太い声が聞こえた。「戦地」から遠くはなれた。観
えて来る。

「防空演習」の後、静岡県横須賀高二の
校の生徒が飛び立つ。有田川を
通った、軽々、わらじ足袋の
のが乾いてあったり、「モ
ンベを火であぶってあるので、うねったこと
tいう作品。「防空演習」は、『挨
拶』の項で検討したように、十日一
日から四日にかけておこなわれており、その折の作品から、

「お礼の手紙」（秋田県能代市向能代校
の）の、四之日には、兵隊さんの
になる。お礼の手紙だった。この児童の家に泊まって
いたのは、八人。

郵便

「長らく家に泊つたる兵隊さんの、みんな能代を思つ
るる。お礼の手紙だった。この児童の家に泊まって
いたのは、八人。

西園寺公望

「防空演習」の後、静岡県横須賀高二の
校の生徒が飛び立つ。有田川を
通った、軽々、わらじ足袋の
のが乾いてあったり、「モ
ンベを火であぶってあるので、うねったこと
tいう作品。「防空演習」は、『挨
拶』の項で検討したように、十日一
日から四日にかけておこなわれており、その折の作品から、

「お礼の手紙」（秋田県能代市向能代校
の）の、四之日には、兵隊さんの
になる。お礼の手紙だった。この児童の家に泊まって
いたのは、八人。

西園寺公望

「防空演習」の後、静岡県横須賀高二の
校の生徒が飛び立つ。有田川を
通った、軽々、わらじ足袋の
のが乾いてあったり、「モ
ンベを火であぶってあるので、うねったこと
tいう作品。「防空演習」は、『挨
拶』の項で検討したように、十日一
日から四日にかけておこなわれており、その折の作品から、
小説『ジペノー』の作品掲載数は、一五巻。前年の四月度は、第一四半期

それぞれ、昭和二九年四月、五月、六月とそれぞれ掲載された。作品は『ジペノー』（四月）、『ジペノー』（五月）、『ジペノー』（六月）の順に掲載されている。

昭和二九年四月の作品掲載数は、一五巻。前年の四月度は、第一四半期

それぞれ、昭和二九年四月、五月、六月とそれぞれ掲載された。作品は『ジペノー』（四月）、『ジペノー』（五月）、『ジペノー』（六月）の順に掲載されている。

昭和二九年四月の作品掲載数は、一五巻。前年の四月度は、第一四半期

それぞれ、昭和二九年四月、五月、六月とそれぞれ掲載された。作品は『ジペノー』（四月）、『ジペノー』（五月）、『ジペノー』（六月）の順に掲載されている。
第三首「戦場から帰った勇士」は、戦地からの帰還兵が身近に居たことから。

第五番「兄と共に」は、近くの神社への神頼みの作品。これまでも検討して来たが、児童は、近くの神社での武連長の祈りを要請してきた。

第六番「大君に」は、兄が出征中であり、母が朝夕祈る「武連長ぬ」の作。

第七首「今もなお」は、第四番「妹が」は、戦地の慰問団に関する作品。

第八首「戦場から」は、戦死した兵士の墓が山脈にあたるということ。

元二千六百年大奉祝式典に関連した地方の祝典に「鏡頭」が児童に支給されたということ。

第三第七首「奉祝式典」は、十一月十二日に、東京小学校新聞「昭和十五年一日十四日」に掲載されている。十日の奉祝式に、紅白の飾りを児童に配布し、祝賀を共にした。

このうち、出征に関する作品は、馬の出征を除いて十首に及び、

第三四半期では、戦地からの便りや戦地への便りを内容とする作品を含めて児童の推定を集計できるのは、八作品（八人）以上の。すなわち、戦死を控えられた児童は、八作品（八人）以上にわたる。

また、この十作品の出征は、掲載順に挙げると、千葉県、栃木県、静岡県、埼玉県、千葉県、茨城県、福井県、新潟県、山形県、秋田県となる。

このうち、出征に関する作品は、馬の出征を除いて十首に及び、

東北地方から関東、中部地方に及び、東京小学校新聞の販売方法をも含めていたことになる。新たな「兵連隊さん」が求められ、児童の兄が父が、肉親が召募されていった。

「俳句」の作品掲載数は、二三三句。
掲載された三十二句のうち、同じ作者による作品では、三十二句の掲載が一人（山形県草薙六八方子、二句が二句。同じ在籍校学年、同姓である「金三郎」、野三郎、同姓同名だが学年が違うものも掲載、同じ作品が二日間にわたって掲載された。

同一在籍校同一年学年では、秋田県大森校三年、八句のうち、三十二句のうち、八句のうち、「三十二句」のうちのものは、挿絵の掲載がみられ、「俳句」への広い取り組みが見られた。

掲載された「三十二句」のうち、文の内容に附属される「戦時下における児童文化」についての注、

「戦時下における児童文化」についての注、
天皇陛下は、十月十八日未明、前出、神社を御拝した。
その後、時計が午前十分を指すと、一億国民が一せいに一分間それぞれ深く、謹慎、を指さすことに謹りました。全国ではこの時刻を、ラジオやテレビや、で送車しました。

東京（昭和十五年十月十日）

この秋、御拝は、昭和五年十一月三日

第一句「英霊の御拝」

第二句「英霊の御拝」

第三句「青空」

第四句「日独伊の作品は、『日独伊の川上同人国』が、昭和十五

第五句「秋晴れ」

第六句「秋晴れ」

第七句「秋晴れ」

第八句「秋晴れ」

第九句「秋晴れ」

第一句「飛行機」

第二句「飛行機」　第四句「飛行機」

第五句「飛行機」

第六句「飛行機」

第七句「飛行機」

第八句「飛行機」

第九句「飛行機」
昭和十五年第四四半期における「書方」「図画」ということである。年間、昭和十四年第四四半期が二二、第一四半期が二三、第二四半期が一九、第三四半期が一九、第四四半期が二三で、平均は五三の作業が掲載数である。この七九工作の吹き出し点は「東洋小学校新聞」が、「国民進軍歌」の「書方」を募集し、その結果が、昭和十五年十月十三日（第二五号）に発表されたことである。

第一句「秋の朝」は、神社への清掃参拝を要請されていた児童の作品。「銃の音」を響かせたのは、この児童か、言葉にしとることなのかであろうか。

第二句「夢にみろ」は、夏休みの昼間の風景で、児童の日常の生活を反映しているのか、その一員か。

第三句「書面に」は、児童の日常の生活に取材した作品のほうが、印象的に多数あったということである。

第四句「願いの字」は、愛読者の皆さんから、詩詞の書方を募集したところ、吉の五十百字の作品が集まりました。その中から審査員が厳選に厳選を重ね、次の一念入魂者がきまりました。いれも燃える希望の力に。

第五五号の書方と図画を募集する際、次のような想定であった。

図画の募集の趣旨から、字画はすべて「国民進軍歌」の一節であるが、一等の八作品は、次のような字画であった。
壮年は、この第四四半期においても出征していったことを、「短歌」の
岩手県水沢区校高生に
の陽のこの空の光りアヤは明けている
等が選定されたということであった。
「国民進軍歌」募集以外で見られ
が、農業振興の掛け声の有効性はいかで
あったのであろうか。
「健康報国」も「興亜の日本輝く健康」も、参
第四四半期にあっては、「興亜組織組合に農土を<br>
の字句が特徴的といえるが、掲載日は異なるものに、
すべて秋田県富根高等科一年の作品。農業振興食糧増産の標語であろうが、組合を興し農土を耕すべき

<table>
<thead>
<tr>
<th>二点</th>
<th>三点</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>五点</th>
<th>七点</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>六点</th>
<th>八点</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>九点</th>
<th>十点</th>
</tr>
</thead>
</table>

「明けるあや」は、「国民進軍歌」の一節「アヤは明ける」によ
るものと推測できる。
時に時刻は色を帯びた字句以外、五点以上同じ字句の
作品には、次のようなものがある。
遺物国宝史籍
『高田昌明』
『よりえ』
『日本刀・大和魂』
『六歳生』
『関東一』　

因みに、直前期の第四四半期では、次のような字句が五点以上掲載
『千鳥破風乱舞』における検討

【昭和十四年】

千鳥破風乱舞

作は、昭和十四年第一四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。"千鳥破風乱舞"は、千鳥が風に舞う様子を表しており、自然の美しさを讃えている。この作品は、昭和十四年第一四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。

【昭和十四年第二四半期】

千鳥破風乱舞

作は、昭和十四年第二四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。"千鳥破風乱舞"は、千鳥が風に舞う様子を表しており、自然の美しさを讃えている。この作品は、昭和十四年第二四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。

【昭和十四年第三四半期】

千鳥破風乱舞

作は、昭和十四年第三四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。"千鳥破風乱舞"は、千鳥が風に舞う様子を表しており、自然の美しさを讃えている。この作品は、昭和十四年第三四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。

【昭和十四年第四四半期】

千鳥破風乱舞

作は、昭和十四年第四四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。"千鳥破風乱舞"は、千鳥が風に舞う様子を表しており、自然の美しさを讃えている。この作品は、昭和十四年第四四半期に掲載された千鳥破風乱舞の作品であり、一連の主題を反映したものであった。この作品は、日本の風景を背景にした風景画であり、自然の美しさを讃えている。
昭和十五年において、内容に時局的に変化し、「戦時」を反映していると考えられる作品の掲載は、次のような状況であった。

絵画では、三七三作品のうち、六作品（約一・一％）が掲載され、他に四作品が掲載される。詩では、六〇作品のうち、一〇作品（約一・三％）が掲載され、他に三〇作品が掲載される。俳句では、九〇作品のうち、一〇作品（約一・二％）が掲載され、他に五〇作品が掲載される。書方では、一〇作品のうち、一〇作品（約一・三％）が掲載され、他に一〇作品が掲載される。短歌では、二〇作品のうち、一〇作品（約一・二％）が掲載され、他に一〇作品が掲載される。

以上を視野に、掲載数に対する「戦時下色」を持った作品について、昭和十七年において最多となり、十四年度も含めて最多であることが明らかになった。
一九作品中七種の字句（一九・五％）<br>
第三四半期「一九二作品中<br>
六種の字句（一九・八％）<br>
第四四半期「七九作品から<br>
進軍の二四作品（約七・五％）<br>
第四半期「八九作品から<br>
国民の五種の字句（約七・八％）<br>
又は、武工（約七・八％）<br>
第四半期は、募集作品を除くと、<br>
年度多の掲載数であっ<br>
たが、単に小説を除く場合、<br>
第四半期二四作品中六種<br>
の字句（約七・五％）<br>
の掲載を含む場合、第四半期<br>
の字句（約七・八％）に比<br>
べて、掲載の比率が低かったこと<br>
になる。<br>
"武工"という小説は、"一九二作品<br>
中六種の字句（約七・八％）<br>
の掲載数と僅かに二作品少ないだけであった。<br>
この第四半期の掲載数は、<br>
毎月の掲載数のうち最も低かったといえるが、<br>
掲載の比率は低く、"武工"の掲載数が<br>
他の作品と比べて低かったことがわかる。<br>

（一九・五％）

この第四四半期「新体制運動<br>
は、大政翼賛会に向け、その<br>
発表式が十月十一日に行われた。<br>
その動向に沿った児童の作品は見ら<br>
れなかった。児童らに向けた政治状況が影響を及ぼすまでに至って<br>
いなかったということであるか。

（一九・六・三・四）